

『生徒テルレスの惑い』のひとつの解釈

本 岡 五 男

1 『生徒テルレスの惑い』のひとつの解釈

『生徒テルレスの惑い』(Die Verwirrungen des Zöglings Törless)の物語は、テルレスが数人の級友を伴って、面会に来た宮中顧問官の両親を見送りに行った駅で始まる。そして、親の膝元を遠く離れてオーストリア帝国東部の辺境の地の、軍人あるいは官吏の養成を目的とする全寮制の学校に入ったテルレス少年が、ホームシックを克服し、友人を得て次第に環境になじんで行くが、級友の金を盗んだバジーニ(Basini)に対する制裁、性行為という異常な状況に巻き込まれ、学校を去らざるを得なくなつて、迎えに来た母親と駅へ向かう場面で終る。最後の場面のテルレスは、精神的な自立を得た青年に成長しているように見える。こういう小説構成からすれば、駅で始まり駅で終る、駅を樞とする発展小説と見えるかも知れない。だが、冒頭に置かれたホームシックの話は四年前の入学当初のことであり、H侯爵の子息との交友と袂別の話もその頃のこと、すでに十六歳⁽¹⁾になると思われる今のテルレスに時間的に直接つながっているわけではない。顧問官夫妻が列車の到着を待っている間の時間を利用して、語り手が挿入したものである。ムージルは物語の展開されて行く時間の経過にはあまり神経をつかわない。バジーニの事件の推移も時間の経過に従って描かれて行くとは言え、「その翌日」とか「その数日後」とかでつながって行くだけで、駅の場面で

始まり駅に向かう場面で終る物語の経過する日数は晩秋の約四週間と推測するしかない。少年テルレスの成長過程が年を追って辿られているように見えて、実は僅か四週間ほどの間のでき事なのである。正確な時間の経過はムージルにとって、この際たいして問題ではなかったのだ。ムージルの主眼は外的刺戟に依じて起こるテルレスの内面世界を描くことにあった。四人の主要人物の間に交わされる直接説話の会話によって展開されるバジーニをめぐる単純な物語の間に、テルレスの内省、連想、空想、思い出などが入りまじり、それに語り手が絶えずテルレスに付き添っていて、テルレスの内面的変化に動機づけをし、解説を施し、あるいはその行状を弁護する。

フリノ (Karl Corino) によれば、陸軍大学を卒業してからエンジニアに進路を変えた当時の若いムージルは、陸軍士官学校で目撃したバジーニ事件に類するでき事を素材にして小説にするつもりはなく、適当と思う二人の作家シュトロープル (Karl Hans Strobl) とシャーマン (Franz Schamann) にこの話を素材として提供した、特にシャーマンはエロティシズムと軍隊生活を描くのを本領としていたのでうってつけと思われたが、シャーマンが夭折したために実現しなかったらしい、という⁽²⁾。ムージルが同じ素材を扱う時、ショッキングな素材それ自体が主題として描かれるのではなく、人間の内面を描くための外枠に用いられることになる。ムージルが主題とするのは、性のめざめ、性のうずきとからみ合って内的自我が自己主張を始める過渡期の年代の認識活動の問題である。

しかし、バジーニの事件の幕が開く前にテルレスはどういう人間で、目下どういう精神状態にあるのかを見ておく必要がある。その為に、両親が列車を待っている間にホームシツクのことや、H侯爵の子息との交友と袂別のことや、その後の友人関係が語り手によって語られ、駅から寄宿学校に帰るとき生徒たちは町はずれのスラブ移民の貧しい家並みの間を通ることになり、彼らと別れたテルレスとバイネベルク (Beineberg) の二人は喫茶店に立ち寄り、

3 『生徒テルレスの惑い』のひとつの解釈

更に娼婦ボジエナ (Božena) を訪れることになるのである。本来のバジーニの物語に入る前の計算された下準備である。

テルレスは外によりもむしろ自分の内面に目を向けがちな、悟性的で、感受性の強い少年であった。感情を悟性によって整理し、あいまいな感情は悟性によってはっきりさせようとする。入学当初の激しいホームシックを克服したのは、それが両親を慕う気持ちから来ているというよりも空虚感のせいであることを突きとめたからである。H侯爵の子息と仲違いをすることになったのは、宗教上の論争の際に、宗教的な訓練を受けた由緒ある地方貴族の心より所をテルレスの悟性が打ち砕いてしまったからである。だがこの場合は、別種類の人間により一種の人間認識の道を開こうと近づいて行った友人であるだけに後悔が残り、感性を無視した悟性の論理の一面性に気づくことになる。語り手は、この公子との間に起った破局のいきさつを「当時テルレスの心の中で後の発展のために準備されつつあったものの特徴を示す」⁽³⁾ エピソードであると言う。事実、この後テルレスは悟性と感性の間を揺れ動くことになる。

悟性的で内省的なテルレスがよりによってクラスで一番悪い連中、つまり、バイネベルクやライティング (Reiting) など数人の、才能があり良家の子弟でありながら時には手がつけられぬぐらいに粗暴になる連中と結びつくことになったのも、H侯爵の子息の場合と同じ理由による。スポーツに熱中することもできず、文学に凝るにしては読書から得られる借り物の感情に嫌悪を覚えるテルレスは、学校から与えられるものが心の空虚を満たしてくれず、より所を彼らとの友情に求めたのである。年上の彼らはより男らしく、より健康で、よりしんが強そうで、自分とは違った人間に見えたからだ。テルレスとは違ったタイプの者とテルレスの結びつきをこういうふう⁽⁴⁾に動機づけて、語り手は、

性的成熟の初期の段階にふさわしい友情と言う。今日両親を見送りに駅へ同行したのはこういう連中である。テルレスは彼らに負けまいとする努力と、その努力を馬鹿らしく思う半面を持ちながら彼らに同調していたが、その為にテルレスは心ならずもバジーニの事件に巻き込まれてしまうのである。

テルレスの意識の奥底に性のうずきがある。町はずれの貧民街を通っている時、ドアの前に立っている上っぱりをひっかけた肌着姿の女たち、窓ごしに、あるいは狭い入口から家の中に目を凝らすとスカートのすそから覗いて見える足や衣服をはち切れそうにしている重い乳房、家々の中から流れ出て来るどんよりとした空気、それらからテルレスは喉につかえた感じとしか言いようのない感じを覚える。秩序ある恵まれた環境に育つて来たテルレスにとってそういう光景は未知なもの、驚くべきものでありながら、同時に強く心惹きつける無秩序の世界である。このすぐ後でバイネベルクと共に訪れるボジェナの所へも、テルレスは似たようなものを求めてすでに度々訪れていた。不品行をする為ではない。恵まれた境遇や外から教えこまれた考えや感情をかなぐり捨てて解放感を得たいという願いがボジェナによって叶えられるのではないかという期待からである。性的なものに対する一種のはにかみによって抑えこまれ、内攻した性のうずきが、その突破口を求めているのだ。テルレスには、この時の言葉では言い表わせない感じがこれからもつき纏うことになる。

テルレスは内的自我に刺戟を受けると、外部世界に対する関心がうすれ、自分自身の思考の中に没入してしまう。バイネベルクと二人で立ち寄った喫茶店で、バイネベルクが語る父親の話には上の空で、暮れて行く窓の外を眺めている時のテルレスがそうだ。完全に暗くなる直前に訪れる庭の中の極度の静けさを見つめながらテルレスがその間に没入していたのは、幼い頃この時刻に森で遊んでいて急にあたりが静まりかえった時、周囲の木々が黙って自分を取

り巻いて見ているように思った思い出と、「耳には聞こえない言葉のようなこの突然の沈黙」⁽⁴⁾の正体は何かという疑問である。この記憶とこの疑問がこれからもテルレスの心から離れない。幼時の体験が、今のテルレスには事物の見せる神秘性に対する驚きとして蘇って来る。語り手は、テルレスには「驚く才能」(ein Talent des Staunens)⁽⁵⁾があつたと言う。

内的自我というのは、あとから教え込まれた知識や社会通念、外から箴められた慣習や規範とは関りなく各人の心の奥底にひそむものであり、幼児の感覚や本能をその内に含む感性的なものであろう。テルレスの場合、それが外界の刺戟に対し常人よりも強く反応し、殊に性意識の高まりはじめた今、悟性が感性を制御し得ず、テルレスの中に感性と悟性の混乱をひき起すのである。かくて、テルレスの関心は、彼自身の感情とその感情を理解しようとしている心底の自我のようなものとの間にある分離線を明確にすることに向う。漠然として把え所のない性のうずき、それとからみ合って頭をもたげて来る内的自我、それと共に起こる外的自我と内的自我のくい違い、社会通念的には普通な見方、感じ方とは違った見方、感じ方、こういったことからテルレスにおいては、事柄はすべて二重の意味をおびて来る。時には悟性の目で見、時には感性の目で見るからである。これからのテルレスは、事柄や人間の見せる二面性に強い関心を示し、この二面の接する部分を見究めようとする。

ボジエナはテルレスの内心のいろいろな側面を早目におもてへ引き出す役目を果たした、と語り手は言う。ボジエナがバイネベルクの母親を話題にして喋っている間に、テルレスの心の中ではいつしかバイネベルクの母親がテルレス自身の母親とすりかわり、二人の会話をよそに思考にふける。ボジエナの乱雑な部屋、すさんだ顔、落ち着きのない目に対し、両親の明るい部屋、手入れの行き届いた清らかで近づきがたい顔、それに落ち着いた足取り、両者には何

ひとつ共通点はない。それにも拘らず両者を結びつけることを可能にするものがある。それは何だろうか。自分は満たされぬ空虚感に悩まされているのに、大人たちは無為の一日、一日を何の疑問もなく結びつけて行く。毎日の単調さを忘れさせるものを大人たちは持っていて、それを自分には隠しているのではないか。全く対照的に見える両者を結びつけているのは、この自分には隠されているものだ。大人たちの昼間の落ち着きぶりを作り上げるものだ。テルレスは、想像の域を出なかつた性の具体的なイメージを得ると同時に、大人の世界の欺瞞性に気づき、明と暗を結びつけるものの存在を予感する。

ボジェナは、バジーニがひとかどの遊び人を装おうて訪ねて来るが、おしゃべりをするだけで高くつくワインを飲んで行くと、ふともらす。バジーニが級友の金を盗む原因である。バジーニの事件の幕開けの時である。

普通の市民的な秩序と伝統を代表する顧問官夫妻が去り、普通の日常的な秩序と伝統との接点である駅から、そういう秩序と伝統を持たぬ混沌とした、見通しのきかぬ世界へテルレスたちは戻って行く。それは辺境の地の荒涼とした霧に包まれた風景の中にある、外界と隔絶された寄宿学校へ戻って行くという意味ではない。寄宿学校のクラスの状態、授業風景、教員と生徒という世代の相違による何らかのトラブル、上級生と下級生との関係、その他一般的な学校生活のおもての部分、存在しないかの如く全くふれられない。テルレスたちが戻って行くのは、バイネベルクとライティングが学校の屋根裏に作っている、誰ひとりその存在を知らぬ、まっ赤な旗ぎれを壁にはりつけたかくれがである。主たる舞台は人目につかぬ、いわば陰の部分に限られ、事件に関係するのはバイネベルク、ライティング、テルレス、それに、そこへ呼び出されるバジーニ、という限られた人物だけだ。テルレスの内面世界に関するもの

7 『生徒テルレスの惑い』のひとつの解釈

だけがクローズアップされ、その他のものはすべて背景へ影うすく押しやられるわけである。お膳立ては整った。脅迫、サディスティクな制裁、性行為、陰謀という異常な状況に置かれればテルレスはどのような反応を示すのか。

寄宿舎の金銭盗難の犯人がバジーニであることを突きとめたライティングが、テルレスと金を盗まれたバイネベルクを屋根裏の赤い部屋に誘い、バジーニの処罰の方法を相談する。テルレスは、罰は受けるべきで、学校に言いつけてバジーニは学校から追い出すべきだと提案するが、犯行は伏せておくかわりに絶対の服従を誓わせ、三人の支配下に置くというライティングに拒絶され、テルレスは不本意ながらバジーニの事件に関して行くことになるのである。ライティングは策謀家で、敵対するグループを作って互いに争わせて楽しんでおり、そうすることで自分を鍛えていると称している権力志向型の人間、ナポレオンを崇拜し、逆らう者には容赦しない冷酷な暴君である。バイネベルクのほうは、印度の聖人に近い人にあこがれており、秘教的な神秘的な世界で天の啓示を得て、精神力により人を支配する力を持つことができると確信している。ライティングやバイネベルクが大まじめで抱いている妄想は、テルレスには十分理解できないし、笑止にも思えたが、こういう連中によってこれからバジーニの身にふりかかるであろう運命が他人ごととは思えない。自己放棄による解放感を夢見たことがあったのを思い起こし、バジーニのようなことはライティングやバイネベルクの手にかければ、不安定な状態にあるわが身にも起こり得ることだとテルレスは思う。きょうははまだバジーニは自分と何ら変わる所はなかったのに、今日は突如として破滅の淵に落ち込んでしまったのである。テルレスの想念にまず浮んだのは、明るい日常の世界と破滅的な世界の間には両者をつなぐ通路があるばかりではなく、その境目は接近しており、いつでも移行できるようにくっついているという驚きであり、どんな時にそれが起こ

るのか、その瞬間に何が起こるのかという疑問である。次に不思議に思ったのは、バジーニの現実の顔の後ろにもうひとつの顔が二重写しのようにぼんやり見えたことである。そして、貧民街を通った時に感じた、言葉では表現できない驚くようなものの存在の予感が蘇って来る。事柄や人間の二面性と、その二面が接している部分の解明の問題がテルレスから離れない。また、そういう認識の問題が起ると、必ず官能的イメージがそれにからみついて来る。テルレスにはそういう認識の問題と、認識と官能のからみ合いの謎を解く鍵がバジーニに秘められているのではないかと思う。テルレスは今まで全く無関心であったバジーニに関心を集中させて行く。学校の日常生活の空虚さを吹き飛ばす謎解きである。

こういうテルレスにひとつの指針をもたらすのは、校庭で寝そべて大空を見上げている時に偶然に得た無限の天の高さによる「無限」の実感である。決まりきったもののように安心してそれで計算することができる、計算上必要なものとしか思っていなかった無限の実体が、天空から生き生きとして自分を見おろしていることに驚く。そしてそれは、幼年時代に森の中で木々に取り巻かれて見つめられていると思った時や、暮れて行く喫茶店の窓の外の「突然の沈黙」の瞬間に感じたこととつながりがある。外的自我と内的自我が、悟性と感性が一致した時の突然の実体の把握である。ムージルは現実の諸関係を別の次元へ止揚した瞬間の状態を「他の状態」と呼んだが、「無限」を実感した刹那、「他の状態」の時によく起こることくテルレスの後ろに立っている壁が水の流れるような音を立て、壁の中に生命が目ざめるように思われるのだった。実体は悟性によって適確に言葉に表現できないのではないか。どんなことも簡単に自然に説明できるが、その説明は内面をむきだしにしないでいちばん外側の皮をはぎとるだけだ、とテル

レスには思われる。「言葉とは感じたことの偶然の逃げ道にすぎない⁷⁾」のである。「無限」の実感には後に、二つの実数をつなぐものとしての虚数の問題につながって行く。

バジーニがまたも多額の借金を作ったということで例の赤い部屋に呼びつけ、バイネベルクとライティングが鞭で凄惨なリンチを加えるが、テルレスは無関心に床に倒れたランプの光を目で追いながら、自分自身を観察することに没頭していた。未知の世界、扱えられない世界を見つめる為に、ランプの光が未知の世界に向いている目のように思えたからだ。テルレスはバジーニ虐待の光景に嫌悪を感じる。テルレスがバジーニに求めているのはそれとは別のものである。

バジーニの事件に巻き込まれてからは、事柄の二面性をつなぐ部分への関心は、単なる関心からそれを明確に認識したいという意欲に変わって来る。言葉の無力さへのいら立ちもこの認識への意欲と関りがある。

はじめに実数があり、計算の最後にも実数があって、この二つの実数が存在しない想像上の虚数によって関係づけられることにテルレスは奇異の念を抱き、目下最大の関心事の集約されたような虚数の実体を数学の教師に尋ねに行く。「無限」の場合と同じで、当然の確固とした概念のように扱ってはいるが、その実体は何であるのか。しかし、そのすぐれた数学者は、虚数は数学的な思考の必然性であって、数学の初心者には理解は無理だから信じることで、としか言えない。それは認識の問題に關っているテルレスには何の意味もない説明である。問題が解決しそうな所まで近づいて行くのだが、テルレスにはその先まで行くことができない。コリノは、テーミング (Jürgen Töming)

とゾーレフェルト (Bielefeld) の説を受け、Torless という名前は英語とドイツ語の混合語で torlos を意味すると
 言っている。⁽⁸⁾

数学の先生が論拠として示したカントの著作もテルレスには結局 torlos になるのであるが、テルレスを新しい段階にふみ入れさせる効果はあった。数学の先生は、恐らくは『実践理性批判』であろうが、この本にはそれ自体としては簡単には分らないが、行動の根拠として一切のことを規定している思考の必然性に出くわす、そして数学の場合とよく似ているのだが、われわれは常にそれに従っているのだ、と言う。問題の解決に性急なテルレスは翌日カントの例の本を買って来たが全く理解できない。しかし、それによって「殆んど夢のように」今まで知らなかった確固としたものが生れたのである。語り手は、それは恐らくは最近受けた影響のもとでひそかに成長したものに違いない、と言っている。ちやうど、混乱状態から抜け出そう、そして、静けさと書物へ戻ろうと思いかけた時である。テルレスは突然目ざめた人のようになり、これ迄のあらゆる荷物を放り捨てようとして、書きためていた詩の原稿を焼き捨てるのである。そして、構えた恰好で、「人間の本性について」(De natura hominum) とラテン語の表題をつけて、ボジェナの所で過ごした晩から最近の漠然とした官能のうずきに至るまでの内面の記録を綴ることになる。ライティング、バイネベルクからテルレスが別れる時が近づいたようである。テルレスが数学に悩まされるのは、外部にある超自然なものを求めているのではなく、自分の内部にある自然なもの、しかも理解できないものを求めているからだ、と言う意味がバイネベルクには分らない。バイネベルクの熱中しているのは妄想であり、テルレスの求めているのは心の中の認識の問題である。バイネベルクはテルレスの求めているものが理解できない。

それにしてもカントはどういう意味を持つのか。行動の根拠として一切のことを規定している思考の必然性は、数

学的な思考の必然性によって計算して行けるように、現実の生活の中にあるということなのか。その数日後テルレスはバジーニの坐っている遙か後ろの席に坐って、バジーニを見ながらカントの本を読むことにより謎めいた人物バジーニの真実を見つけよう、としてカントを読む場面が出て来るが、そして、もとよりそういうことは失敗に帰するが、これも何を意味しているのだろうか。カントの悟性を通じてバジーニの謎を解こうとしたのか。ムーシルがたいた動機づけもなくカントを持ち出した真意は何だろう。ピーターズ (Frederick G. Peters) は、テルレスの夢の中に戯画化されて出て来る大冊を抱えた頭でつかちな小男カントから、テルレスはカントの合理主義も存在の深みには至らぬ皮相なものに思えたのだ、としているが、⁽⁹⁾ ムーシルの真意も恐らくはそうであろう。

「人間の本性について」はこれまでのテルレスの内面生活のいわばレジューメである。テルレスと共に問題点を整理する意味で、そのおおよそを抜き出してみよう。

ほかの人たちにはあたりまえに見えることに不審の念を起すのはなぜか。この不審の念に苦しい思いをするのは何のせいだ。この不審の念が淫猥な感じを呼び起すのはなぜか。不審の念を呼び起すのは目立たない生命のないものだが、それらの何が不審がらせるのか。それは知らない「あるもの」(ein Etwas) なのだが、その存在を感じ、それに影響される。それは話したがっているようで、世界は声なき声に満ちている。しかし、人間たちからも影響を受ける。ある時期までは人間というのは自分たちが考えているとおりのものだと思っていたが、生命のないものと同じように影響を及ぼして来る。隣にいる彼らがふだんと全く変らないのを見ると何ら異常なことが起こっているのではないと自分を納得させようとするが、同時にまた心の中にそれに反抗するものがある。この変化が始

まったのはバジーニの一件の時だった。⁽¹⁰⁾

手記はここで途絶するが、一步前に進むにはバジーニにおいてそれを確めるしかない。

四日続きの休暇で寄宿舎にはひと気のない機会に、テルレスはバジーニの謎を解決しようとする。テルレスが聞きたいのは、バジーニが勘違いして喋る、ライティングやバイネベルクがどういうふう虐待し、その挙句に性行為を強要するかではない。テルレスが聞きたいのは、どういうわけで、どんな気持で盗みをしたのか、また、その瞬間に内部で何が起こったか。ボジェナの所で男らしさを誇っておきながら、性行為を強要されればそれに応じているが、その時内部で何か言うに言われぬことが起こらなかつたか、ということである。テルレスは自分自身の問題の解決の糸口をバジーニから得たい。だが、バジーニはテルレスの質問の意味が分らないし、何の説明もできない。テルレスにとっての大問題の解決になるようなものをバジーニは持っていないのである。その夜バジーニの誘惑に屈して、体と頭の分裂したテルレスは性行為をすることになるが、バジーニにはテルレスはもはや全く関心を抱かない。バジーニは見たままの人間でしかなく、また、誘惑に屈したことで外部からバジーニを眺めることができなくなったからである。バジーニにかけていた期待も空しくなった。謎である限りにおいてのみ興味のあったバジーニの運命は、もはやテルレスにはどうでもよいことである。後に残ったのは、何かはつきりしないものあとを追って、自分の内面の奥深くまで辿ったという意識だけであった。ライティングは結局サディスト以上の者ではなく、バイネベルクは結局妄想のとりこになつておしやべり屋以上の者ではないと知って、テルレスは彼らを罵倒し、袂別する。

バジーニに対する暴力事件が明るみに出て、査問された時のテルレスの答弁は、前の手記に続くものである。バジーニの場合には間違っていたことをしていない。内部に、すべてのものを悟性の目で見ない、第二の生命があって、これが圧倒して来、また、まわりにひしめいたので、それをじっと見つめていたのだ。しかし、それが間違っていたことが分った。事物はあくまでも事物であるということ認め、それらを悟性の目で見たり、ほかの目で見、それを比較するようなことはしない、という主旨のものであった。査問の教師たちにはテルレスの答弁が理解できない。教師たちはありきたりの概念に置きかえて問い直すが、テルレスの滔々と述べる内面の問題には対応できず、途方にくれてしまう。

しかし、テルレスの如き精神の持主は学校外で私的 education を受けるほうがよいとする校長の見解と、この学校はもはや自分のいるべき所ではないとするテルレス自身の判断でテルレスは学校を去ることになるのである。

とすれば、この約四週間の間テルレスを惑わせたものは、この答弁の中に出て来る第二の生命、抑えられて内攻している性衝動と一体になった内的自我、感性の発動による内的混乱状態、そしてそれから抜け出そうとして抜け出せない焦燥だったのだ。身過ぎ世過ぎによる一応の固まった性格を持たぬ成長期のテルレスが、大人の常識的、日常的分別を拒否して自分なりに自分に誠実に生きた結果である。

懸命に生きて来たテルレスであったが、バジーニの事件をへて後に何が残っただろうか。あまりにも荷の勝った課題を課して苦闘した結果は、すべて、通り抜けることのできぬ門の前に、つまり、いま一歩という所で佇むことではなかったか。はっきりと後に残ったものは、心の奥底まで辿ったという記憶と「無限」の実感の体験とバジーニの

裸身による官能と結びついた美意識の開眼ぐらいであろう。バジーニの事件はテルレスの人生にとつて、虚数のように、後の成長へ橋渡しするものであつたように思えてならない。

ムージルはこの作品の執筆中、あまり内的必然性のない愚作である、と言っていたという。原稿をいくつかの出版社に送ったがすべて拒絶され、ムージルはケル (Alfred Kerr) に原稿を見てもらった。そしてケルがムージルと共に一行一行推敲して、漸く出版の日の目を見たものであつた。⁽¹¹⁾ 出版は一九〇六年であり、ムージル二十五才の時の作品である。

この処女作が好評だつたのに拘らず愚作としたのはどういう所にあつたのだろうか？ 思春期の観念小説である為に、少年には荷の勝った課題の追求となり、大人の語り手が随所に顔を出して来て、テルレスの思考を補ない、テルレスのバジーニとの性行為を長々と弁解したりしなければならなかつた点であるかも知れない。後年のムージルならば語り手がのさばって来ることはなく、登場人物の想念として叙述される所である。この作品では、テルレスが感じ考えたことと語り手が感じ考えたことが絶えず入りくんで来る。以後ムージルが小説や戯曲で扱うのは大人の世界ばかりである。

それだけではない。ムージルは描こうとして描ききれなかつた不満があつたのではないだろうか。冒頭に、すばらしい宝を掘り当てたと思つて持ち帰つてみると偽物であつたりガラスの破片であつたりする、というメーテルリンクのモットーが掲げられている。とすればこのモットーは始めるに當つてではなく、後から置かれたものであろう。それにも拘らず闇の中で変ることなく輝いている宝物を探し求めて行くのが、これからのムージルの仕事である。

なお、語り手が ich として出て来る箇所⁽¹²⁾があり、読者に Sie で以って呼びかける箇所⁽¹³⁾がある。これらはあるふれた小説技法であるけれども、後年のムージルの場合には考えられないことである。推敲もれであるかも知れない。

注

- (1) ムージルは十二歳でマイゼンシュタット (Eisenstadt) の陸軍幼年学校 (Militär-Unterrealschule) に入り、二年後に陸軍士官学校 (Militär-Oberrealschule) に進む。三年間在学した。この作品の舞台は士官学校である。
- (2) Karl Corino : Törleß ignotus in Text + Kritik 21, 22 S. 69
- (3) Gesammelte Werke 6 S. 10.
- (4) G. W. 6 S. 24 (15) G. W. 6 S. 25
- (6) ムージルが構築しようとした究極の状態である。この概念をめぐって諸説があるが、経験的現実の次元の外にあり得る、因果関係の通用しないあらゆるものの現実と言えらるであろう。
- (7) G. W. 6 S. 65 (18) Corino の前掲書 S. 71
- (9) Frederick G. Peters: Robert Musil Master of the Hovering Life p. 41-42
- (10) G. W. 6 S. 89
- (11) Helmut Arntzen : Musil-Kommentar S. 95
- (12) G. W. 6 S. 9 Z. 19 (17) G. W. 6 S. 113 Z. 11

使用テキスト

Robert Musil : Gesammelte Werke 6, Rowohlt Verlag, 1978

参照文献

- Robert Musil Text + Kritik, 21, 22 Richard Boorberg Verlag, 1972
- Hertwig Gradischung : Das Bild des Dichters bei Robert Musil, Wilhelm Fink Verlag, 1976
- Helmut Arntzen: Musil-Kommentar, Winkler Verlag, 1980
- Eithne Wilkins und Ernst Kaiser, Musil und die Quadratwurzel aus minus Eins in „Robert Musil Leben Werk Wirkung“, Rowohlt Verlag, 1960
- Frederick G. Peters: Robert Musil Master of the Hovering Life, Columbia University Press, 1978